

『わが闘争』を読む

“Meine Kampf” by Adolf Hitler

アドルフ・ヒットラー著, 平野一郎 将積茂訳, 角川文庫

1926.12 原著出版

札幌たのしい授業・研究サークル用レポート

2005.6.25 Hau'oli la hanau 6.28

仮説実験授業研究会 北海道・丸山秀一



【質問】

あなたはアドルフ・ヒットラーという人を知っていますか。知っていることを出し合いましょう。

■ヒットラー

ヒットラーは、1889年ドイツ帝国の同盟国オーストリアに生まれました。その後、ヒットラーはドイツに移住し、25歳の時、当時の多くの若者と同じく、第一次世界大戦に志願してドイツ帝国軍に入隊しました。そして、除隊後は小さな政党に加入して政治活動を始め、ほどなく議長として党を支配し、ナチ党として発展させました。その後、政権奪取を企てた武装蜂起に失敗し、党は解散、ヒットラーも投獄されました。釈放後、彼は党を国会での第一党にまで成長させ、全権委任法を成立させました。こうして総統としてドイツを支配したヒットラーは、侵略戦争を開始し、敗戦と共に自殺しました。

『わが闘争』は、ヒットラーの著作で、自伝的内容ながらも、政治、外交、戦争、社会、宗教、教育、芸術、新聞、宣伝、スポーツなど多くの問題が論じられています。

【問題】

では、『わが闘争』は、いつ頃書かれたものだと思いますか。

予想

- ア 従軍前
- イ 従軍から党議長になるまで
- ウ クーデターから総統就任まで
- エ 開戦から自殺まで
- オ 死後

■ヒットラーの予想

1923年11月、ヒットラーは政権奪取のため武装蜂起しましたが、軍部の支持を得られずに失敗して、逮捕投獄されました。ヒットラーは失敗を反省し、「権力奪取に合法的手段を用いる」と方針を変え、獄中で『わが闘争』を書き上げたのでした。『わが闘争』は、出版後、驚異的に売り上げを伸ばし、当時のドイツで総計1000万部が売れた大ベストセラーとなりました。

そして、彼は『わが闘争』の政治哲学通りに行動し、独裁者となることができたのですが、彼のどんな理念がそれを可能にしたのでしょうか。『わが闘争』の内容についてみていきましょう。

【問題】

ヒットラーは、自分の理論を「過去を学ぶことで導き出した」としています。では、彼は「歴史を学ぶ意義」をどのようにとらえていると思いますか。

予想

- ア 未来を予想するため
- イ 歴史を動かした原因を探るため
- ウ 現在を理解する手がかりとして
- エ 祖先の生き様を現代にも生かすため
- オ 民族の偉大さを確認するため

■歴史の見方

- ・ 「歴史を学ぶ」ということは、歴史的な事件として我々の目に見えるものを、実際に引き起こした原因としての力を発見し、見いだすことである。(中略)

読書や学習の技術というものはまた、次の点にある。すなわち、本質的なものを保持し、本質的でないものを忘れること。

そして彼は「歴史を動かした原動力」を「人種間の生存をめぐる闘争と強者による弱者の征服の過程」とみなしました。この「社会ダーウィニズム」の世界観によって、「ユダヤ人排斥」と「ドイツ民族の生存圏樹立」を正当化したのが、『わが闘争』のメイン・テーマです。

【問題】

ヒットラーは民主主義を「衆愚政治」とし、「議会制度により政治に責任を持つ人物がいなくなった」として、「全責任を取る絶対的指導者」の必要性を唱えました。

では、そういった権威を獲得するため、「権威の原理」としてヒットラーが最も重要視していたのは何だったと思いますか。

予想

- ア 武力
- イ 判断力
- ウ 指導力
- エ 人気

■ 権威の原理

- 権威を形成するための第 1 の基礎は、常に人気である。けれどもこの基礎にのみ基づく権威は、まだ非常に弱く、疑わしく、また動揺している。それゆえこういう人気にだけ立脚している権威の担い手は、権力を形成することによって、権威の基礎を改善し、確実にしようと努力しなければならない。権力、したがって強制力の中に、我々はすべての権威の第二の基礎を見るのである。それは、わずかに本質的により安定し、確かであるが、常に第一のものより断じて力強くない。人気と強制力が結合し、それらが共にある期間継続することができる、権威はさらにもっと硬い基礎の上で立ち上がるができる。伝統の権威がそれだ。ついに人気と力と伝統が結合したときに、権威は揺るがしがたいものと見られて良いのだ。

- 大衆への効果

- …偉大な運動はすべて大衆運動であり…

- だから偉大な目標を持つ運動は、幅広く民衆と関係を失わないよう、几帳面すぎるほど努力しなければならない。

- どの問題もまず第 1 にこの観点から吟味し、そしてこの方向に決定を下さなければならない。

- それは、大衆への影響を及ぼす能力を減少し、あるいは弱くするだけであるかも知れないものをすべて避けなければならない。それも「民衆扇動的」理由からではなく、大勢の民衆の強力な力なくしては、偉大な理念もそれがどんな崇高で高遠に見えても、実現することができない。という簡単な認

識からである。

…大衆はすぐれた人々によってまずひとたび一定の方向に動かされると、さらに弾み車のように、攻撃の強さに重みと一様な持続性を加えるものだ…

このようにヒットラーは、「支持する存在」として大衆の重要性を理解していました。彼は民主的な手続きによって、民主主義を破壊しようとしたのです。

【問題】

では、大衆に支持されるには、大衆をどう扱えばよいのでしょうか。ヒットラーはなんと言っていると思いますか。

予想

- ア できるだけ要求を聞くこと
- イ 日々の生活を保障すること
- ウ あまり関わらないこと
- エ 独善的に支配すること
- オ そのほか

■大衆の心理

- ・ 大衆の心理は、すべて中途半端なものに対しては感受性が鈍いのだ。

女性のようなものだ。彼女らの精神的感覚は、抽象的な理性の根拠などによって定められるよりも、むしろ足らざるを補ってくれる力に対する定義しがたい、感情的なあこがれという根拠によって決せられるのだ。だから、弱いものを支配するよりは、強いものに身をかがめることをいっそう好むものである。大衆もまた哀願するものよりも支配するものをいっそう好み、そして自由主義的な自由を是認するよりも、他の教説の併存を許容しない教説によって、内心いっそう満足を感じずるものである。彼らはまた、たいていそれをどう取り扱うべきかを知らないし、しかも容易に見捨てられていると感ずるものである。彼らは破廉恥な精神的テロや、彼らが人間的自由をしゃくに障るほど虐待されていることにも気がつかないのだ。彼らは全教説のうちに潜む狂気に決して気づかないのである。そのようにして彼らは、目的のハッキリしているこの傍若無人な力や残虐さを見て、いつも屈服しているのだ。

このようにヒットラーは「完全に排他的で独善的教えを掲げて、大衆を支配することが、大衆の支持を得ることになる」としていたのです。

【問題】

ではヒットラーが言う「本当に偉大な民衆の指導者の技術」とは、具体的に大衆に対してどのような「敵」を提出することとしているのでしょうか。

予想

- ア たったひとつの敵
- イ あまり強力でない敵
- ウ 「裏切り者」としての敵
- エ 存在が不確かな敵



“TIME” Dec. 21, 1931

記事は「ヒットラーに対
抗する三人の政治家」

■正義と悪

- ・ 一人の敵への集中

人々が一般に成果を多々買い取ろうとするならば、純粋に心理的考慮からも、決して大衆に二つまたはそれ以上の敵を示してはならない。そうでなければ、闘争力を完全に分裂に導くからだ。

概してどんな時代でも、本当に偉大な民衆の指導者の技術というものは、第 1 に民衆の注意を分裂させず、むしろいつもある唯一の敵に集中することにある。民衆の闘志の傾注が集中的であればあるほど、ますます運動の磁石的吸引力は大きくなり、打撃の重さも大きくなるのである。色々の敵を認識することは、弱い不安定な性格のものにとっては、自己の正当性を簡単に疑わせるきっかけだけを作りやすいから、別々にいる敵でさえもただひとつの範疇に属していると思わせることが、偉大な指導者の独創力に属しているのである。

動揺している大衆は、自分が大勢の敵と争っているのを見ると、すぐに客観的態度を取り、実際に他のすべてのものたちが間違っていて、ただ自己の民族や自己の運動だけが正しい状態にあるのかどうかと、疑いを投げかけるものである。

しかしそれと同時に、早くもまず自己の力が衰えてくる。だから内的には異なっている敵をいつもひとつにまとめねばならない。そうして自分の支持者たる大衆の目には、ただひとつの敵に対してだけ闘争がなされているのだというように、まとめるばならない。これが自己の正義に対する信頼を強め、正義を攻撃するものに対する憤激を高めるのである。

たくさんの敵をひとつにまとめる方法は簡単です、それらを「テロリスト」や「悪」という言葉でくくってしまえばよいのです。敵が「悪」であれば、こちらは「正義」に決まっているのです。そして、そういった単純明快な理屈が大衆を動かすというわけです。

【問題】

さてヒトラーは、政権を握った後の「国家を維持する力」を現実的に何に求めていたと思いますか。

予想

- ア 経済力
- イ 軍事力
- ウ 愛国力
- エ そのほか

“TIME” Apr. 14, 1941
記事は「独裁者の時間」



■愛国心

- ・ 国家を維持する力

国家を形成したりあるいはまた国家を維持するだけの力とは現実に何であるか、と問うならば、それを二、三の言葉に要約しうる。すなわち全体のために個人を犠牲にする能力と意志である、と。この徳が経済と何ら関係がないことは、次の簡単な認識から推定できる。人間は決して経済のために一身を犠牲にしない、すなわち人間は商売のために死ぬものではなく、ただ理想のために死ぬものだと言うことである。イギリス人が民衆の心を認識する上で心理的に優れていることは、彼が戦う場合に与える動機付けを知ること以上によく示してくれるものはない。我々がパンのために戦っているのに、イギリスは「自由」のために、それも自国民のためでなく、そうだ、小国の国民のために戦ったのだ。

第一次世界大戦は、ドイツには「領土拡張のための戦い」でありましたが、英国は「ドイツの覇権を阻止するためのもの」でした。「正義」は、英国の方が唱えやすかったというわけです。

しかし、そういった「きれいごとの正義」だけでは、戦争を続けてゆくことはできないことも、ヒットラーは、よくわかっていました。

- ・ 高揚させ続けること

感激というものは一度砕けたら、もはや必要に応じて目覚めさせたりすることはできない。…感激は陶酔であり、そしてその状態でずっと維持するべきだ。しかし人々はこの感激

の力なくしては、人間として考えられる限りの最も巨大な要求を、国民の精神的本性におくこの戦争に、どうして地歩を維持すべきだろうか。

私は大衆の心を十分に知っていたので、人々は「美的」な高揚では鉄を熱しておくために必要な火をかきおこすことができない、ということもよく知っていた。

しかし精神の高揚をいつまでも維持することは、宣伝だけでは難しいことです。

【問題】

ヒットラーは、暴力の行使については、どういう考えを持っていたのでしょうか。

予想

- ア 積極的に暴力を行使する
- イ 暴力だけでは敵には勝てない
- ウ 暴力は最後の手段
- エ そのほか

■暴力の行使

精神的理念を武力で根絶することができるだろうか。粗暴な暴力を使って「世界観」を克服しうるだろうか。・・・

観念及び理念、同様に一定の精神的基礎を持つ運動は、これが誤っていると真なるとにかかわらず、ある程度発達してからは、技術的な権力手段でもってしても、この有形の武器が同時に新しい扇動的思想や理念あるいは世界観の裏付けがないときは、粉碎することができないということである。

暴力だけを用いて、その前提としての精神的基礎観念という推進力がない場合には、理念の担い手の最後の一人まで徹底的に根絶し、最後の伝統まで破壊する形を取らぬ限り、理念と、理念を流布することを決して絶滅させることはできない。・・・すなわち、先進的前提なしに行われるすべての迫害は、道徳上正当なものとは考えられず、民族の本当に価値ある分子ををむち打って反抗させ、不当に迫害された運動の精神的内容を獲得することに全力を尽くすからである。

だから迫害が増せば増すほど、内心で信奉する者の数が増加する。したがって新しい教説の徹底的な殲滅は、その絶滅をさらに大きくしつねに高める方法でのみ実施され、その結果ついに当該民族や国家からも、真に価値ある血をすべて奪い去ることになる。しかしこれには報いが来る。いわゆる「国内」の純化は、一般的な無力化という代償の上でのみおこなわれうるからである。だがこういう過程ももともと、支配すべき教説がある一定の小範囲をすでに踏み越えてしまったときには、もはやいつも無駄である。

・・・しかし實際上、精神的基礎のない暴力によって、教説やそ

の組織的成果を根絶しようとする試みは、ほとんどすべて失敗に帰するのである。実際次のような理由から、望んだものと正反対に終わることもまれではない。すなわち、

露骨な暴力という武器を持ってする闘争方法の第1の前提は、堅忍さということである。それは、ある教説などを抑圧するためには、その方法をたえず一様に適用した場合にだけ、その意図を達成する可能性があるということだ。しかしここでまた暴力が動揺して寛大な態度に変わるやいなや、抑圧せらるべき教説はたちまち再び息を吹き返すだけでなく、圧迫の波がない日後には、耐え忍んだ苦難を越えた憤激が、古い教説に新しい支持者を導き入れ、前からの信奉者は前より大きな反抗心と、より深い憎悪をもってこれを支持し、そのうえすでに分散してしまった変節者も危機が除かれると再び古い立場に復帰しようとして、この教説は迫害される毎に新しい価値を得ることができる状態になってくる。暴力を永久に一様に適用することにおいてのみ、成功のための第1前提がある。けれどもこの堅忍さは、いつもただ一定の精神的確信の結果である。確固たる精神的基礎から生じたのでないあらゆる権力は、動揺せる不安定なものになる。ただ熱狂的な世界観だけにあり得るような安定性を欠いているのだ。暴力は個々のその時々エネルギーや凶暴な決断から出てくるものであり、だがそれゆえ人格や本質的性格や強さの変化に従属するのである。

つまり「暴力は〈新しい世界観〉という精神的基礎となる信念があってこそ有効」というわけです。

- 世界観の攻勢

すべての世界観は、宗教的要素が多かろうと、政治的な要素が多かろうと、反対者の理念の世界を消極的に絶滅するために戦うよりも、むしろ自己の理念を積極的に実現するために戦うのである。しかし、それゆえこの闘争は防御よりも攻撃である。…敵の教説を絶滅するという消極的な目標は、いつ達せられるか、確保されたと見なされて良いか、ということを決めたい。それゆえ世界観の攻撃は、世界観の防衛よりも組織的であり、強力でもある。…精神的精力に対して暴力を用いてする闘争は、剣それ自体が、新しい精神的教説の担い手、宣布者、弘布者として現れない限り、ただ防御に過ぎないのである。

かくして人々は次のように総括的に断定することができる。すなわち、

ある世界観を、権力を用いて打倒しようとするあらゆる試みは、その闘争がある精神的立場のための攻撃という形を取らない限り、最後には失敗する。相対立する二種の世界観の戦いにおいてこそ、残酷な力の武器を不屈に、容赦なく用いて、その支持した側に判定をもたらさるのである。

ヒットラーの言う「世界観」は「正義」と言い換えても良いかも知れません。そして「その正義を実現するための闘争をすべき」というわけなのです。

【問題】

ヒットラーがその「闘争」に用いた武器のひとつが「宣伝」です。ではその宣伝の対象はどんなひとたちだったと思いますか。

予想

- ア 国民全体
- イ 全国民と諸外国
- ウ 知識階級に限定
- エ 大衆に限定

May 7, 1945
記事は「売国奴」



■ 宣伝という武器

・ 新聞

…事実、新聞の意味はなんと言っても、実に巨大なものである。新聞は一般的に言って、いくら高く評価しても過大評価されると言うことはあり得ない。なにしろそれは現実に、相当の年配になった人々に対し、教育の延長という働きをするからである。

新聞の読者はその際、一般に三つのグループに分類される。

すなわち、第1は読んだものを全部信じる人々、

第2はもはや全く信じない人々、

第3は読んだものを批判的に吟味し、その後で判定する頭脳を持つ人々、である。

…第3のグループに属する人々にとっては、新聞がでっち上げるナンセンスもほとんど危険がない…しかし残念なことは、このような優れた人間の価値が、まさに彼らの知能にだけあるに過ぎず、その数にはないことである。——このことは賢明であることに意味がなく、多数がすべてであるような時代における不幸なのだ。大衆の投票用紙があらゆることに判決を下す今日では、決定的な価値は全く最大グループにある。そしてこれこそ第1のグループ、つまり愚鈍な人々、あるいは軽信者の群衆なのである。

民主主義社会では、選挙によって政治が決まります。その票を左右するのは、大多数をしめる大衆なのです。このヒットラー日の考えは、日本の政治家にも受け継がれています。1994年自民党選挙対策本部長は『ヒットラー選挙戦略』という本を出して、政

治家たちに絶賛されました。

- 宣伝は大衆にのみ

…宣伝は誰に向けるべきか。学識あるインテリゲンツィアに対してか、あるいは教養の低い大衆に対してか。

宣伝は永久にただ大衆のみに向けるべきである！

インテリゲンツィアや、今日遺憾ながら往々にしてインテリと称するものに対しては、宣伝は不要で、学術的教化というものがある。しかし、宣伝はその内容上学問ではない。

- 宣伝の課題

宣伝の課題は、個々人の学問的な形式ではなく、ある一定の事実、ある過程、必然性とうに大衆の注意を促すことにあ
る。そのために宣伝の意義は、まず大衆の視野にまでずらされねばならない。

それだからその技術は、優れた方法で、ある事実の現実性、ある過程の必要性、必要なものの正当性等について、一般的確信ができるようにするところのみにもっぱら存する。しかし宣伝はそれ自体必要なものでなく、またそうではありえず、その課題はまさしく、ポスターの場合と同様に、大衆の注意を喚起することではなければならない。もともと学問的経験のあるものや、教養を求め洞察をうるために努力しているものの教化にあるのではないから、その作用はいつもより多く感情に向かい、いわゆる知性に対しては大いに制限しなければならない。

宣伝はすべて大衆的であるべきであり、その知的水準は、宣伝が目指すべきものの中で最低級のものが分かる程度に調

整すべきである。それゆえ獲得すべき大衆の人数が多くなればなるほど、純粹の知的高度はますます低くしなければならない。しかし戦争貫徹のための宣伝の時のように、全民衆を効果圏に引き入れることが問題になるときは、知的に高い前提を避けるという注意は、いくらしても十分すぎるということはない。

宣伝の学術的な余計なものが少なければ少ないほど、そしてそれがもっぱら大衆の感情をいっそう考慮すればするほど、効果はますます的確になる。しかもこれが、その宣伝が正しいか誤りであるかの最良の証左であり、二、三の学者や美学青年を満足させたかどうかではない。

というようにヒットラーの考えは「大衆の支持を得る」と実にハッキリとしていたのです。そして「ひとりの敵への集中」で述べように、次のように語ります。

・ 宣伝の心理

宣伝の技術はまさしく、それが大衆の感情的観念界をつかんで、心理的に正しい形式で大衆の注意を引き、さらにその心の中に入り込むことである。

…宣伝におよそ学術的教授の多様性を与えようとすることは、誤りである。

大衆の受容能力は非常に限られており、理解力は小さいが、そのかわりに忘却力は大きい。この事実からすべての効果的宣伝は、重点をうんと制限して、そして是をスローガンのように利用し、その言葉によって、目的としたものが最後の一

人にまで思い浮かべることができるように継続的に行わなければならない。人々がこの原則を犠牲にして、あれもこれも取り入れようとするとき、すぐさま効果は散漫になる。というのは、大衆は提供された素材を消化することも、記憶しておくこともできないからである。それとともに、結果は再び弱められ、ついにはなくなってしまうからである。

表現の線が太くなればなるほど、その戦術の決め方は心理的にますます正しくしなければならない。

ドイツの宣伝は敵をバカにしたものだったが、前線の兵士はすぐにそれが間違っていたことに気がついた。英米の宣伝は敵を野蛮人と思わせた。敵が強ければ強いほど兵士は、それは敵の野蛮さの証明と受け取り、憎悪を高めた」

- ・ 絶対主観的

…すべての宣伝活動一般の第1前提を理解していなかった。すなわち、宣伝に用いられるすべての問題に対する原則的に主観的・一方的な態度である。

たとえば人々が、ある新しい石けんを吹聴しようとしているポスターについて、その際、また他の石けんも「良質」であると書いたなら、人々はなんと言うだろう。

人々は、これには呆れて頭を横に振るより仕方がないだろう。

政治の広告でも、事情はまさしくその通りである。

宣伝の課題は、たとえば種種の権利を考慮することではなく、まさに宣伝によって代表すべきものをもっぱら強調することにある。宣伝は、それが相手に好都合である限り、大衆に理論的な正しさを教えるために、真理を客観的に探求すべ

きではなく、絶えず自己に役立つものでなければならない。

戦争の責任について、ただドイツだけがこの破局の勃発に責任があるのではない、と論ずることは、この観点からすれば根本的に誤りであった。かえって実際には、本当の経過はそうでなかったにしても、事実そうであったように、この責任をすべて敵に負わすことが正しかったであろう。

・ 変化の提供ではない

…宣伝は、鈍感な人々に間断なく興味ある変化を供給してやることではなく、確信させるため、しかも大衆に確信させるためのものである。しかしこれは、大衆の鈍重さのために、ひとつのことについて知識を持つという気になるまでに、いつも一定の時間を要する。最も簡単な概念を何千回も繰り返すことだけが、結局覚えさせることができるのである。

変更のたびに、宣伝によってもたらされるべきものの内容を決して変えてはならず、むしろ結局はいつも同じことを言わねばならない。だからスローガンはもちろん種種の方向から説明されねばならないが、しかし考察の最後はすべていつも、新しいスローガン自体に戻らねばならない。そのようであってこそ宣伝は統一的であり、まとまりのある効果を及ぼすことができ、また効果が及ぶのである。

この決して離されてはならない大きな線のみが、いつも変わらず首尾一貫した調子で、究極的成果を上げるのである。しかしさらに、かかる堅忍不拔さが、どんなに巨大な、ほとんど理解しがたいほどの成果に導きうるか、驚嘆と共に確認しうるであろう。

すべての広告は、商売の分野でも、政治の分野でも、継続

とその利用のむらのない統一性が成果をもたらすのだ。

「ウソも 1000 回繰り返せば信じられる」ということです。私たちは、何回も出会っている人物には親近感を持ち、信用します。こうして、アナウンサーは選挙に当選し、詐欺師は相手をだますことに成功するのです。

・ 唯一の課題への集中

不可能に見える要求や、課題を満たすことが問題である場合には、例外なく、一民族の全注意を、ただひとつの問題に限って、統一しなければならぬ。ただそのような場合のみに、一民族は真に偉大な仕事や、労苦を喜んで引き受け、また、それを行うこともできるだろう。

【問題】

ヒトラーは「宣伝は真に恐るべき武器だが、単なる武器にし過ぎない」と語っていました。彼は「大衆を服従させ続けるためには、ある回り道が必要である」としていましたが、それはどんなことだと思えますか。

予想

- ア 英雄としての犠牲者
- イ 大衆の生活向上
- ウ 宗教的体験
- エ そのほか

■大衆の獲得

- ・ 大衆の国民化の戦術的観点

①国家の高揚に大衆の心を引くつけるためには、どんな社会的犠牲も大きすぎると言うことはない。

②大衆に対する国民教育は社会的向上という回り道を通して初めて可能である。

③大衆の国民化は、決して中途半端や、いわゆる客観的立場での弱々しい強調ぐらいでは起こるものでなく、とにかく追求しようと思った目標に向かって容赦のない態度、熱狂的に一方的な態度を取ることによって可能となるものである。

④民衆の心を獲得することは、自分の目標に対して積極的な闘争を指導してゆくことに並んで、この目標の敵対者を絶滅させる場合にのみ成功できる。

民衆はどんな時代でも、敵に対する容赦のない攻撃を加えることの中に自分の正義の証明を見だし、逆に他者の絶滅を断念することは、たとえそれを自分が正しくないことの証拠と感じはしないにしても、自分の正義についての不誠実と感じ取る。

大衆は本能の塊に過ぎず、彼らの感情は、敵同士であることを望んでいると主張している人々のお互いの握手を理解しはしない。彼らが望んでいることは、より強力なものの勝利とより弱いものの絶滅あるいは弱いものの無条件の隷属である。

(中略)

⑫ある運動の未来は、支持者がその運動をそれだけが正しいものであると主張し、同じような性質の他の組織に対して最後まで貫き通す際の熱狂、いや不寛容さによって左右される。

…キリスト教の偉大であったのは、幾分類似した性質を持っていた古代の哲学的意見と妥協交渉を試みた点にあるのではなく、自己の教義の厳格な熱狂的告知と、その弁護に基づくものであった。

かくして政権を取ったヒットラーは、仕事や住宅、福祉、娯楽の提供などで大衆の生活向上に気を配りました。

【問題】

ヒットラーは教育についても多くのことを書いています。では、彼が「学校教育で一番時間を取るべき」とした教科はなんだったと思いますか。

予想

- ア 社会
- イ 国語
- ウ 体育
- エ そのほか

DVD「ヒットラー」



■ヒットラーの学力観

- ・ 民族主義国家の教育原則

…全教育活動をまず第 1 に、単なる知識の注入におかず、真に健康な身体の養育向上におくのである。そのときこそ第 2 に、さらに精神的能力の育成がやってくる。だが個々でも、その先端には人格の発展、とりわけ喜んで責任感を持つように教育することと結びついている意志力と決断力の促進があり、そして最後に初めて学問的訓練が来るのだ。

その場合、民族主義国家は、次の前提から出発しなければならない。すなわち、実際に学問的教養はさしてないが、肉体的には健康で、善良で堅固な性格を持ち、欣然とした決断力と意志力に満ちた人間は、才知に恵まれた虚弱者よりも、民族共同体にとってはより価値がある。…運命を決する困難な闘争においては、知識のないものが敗れることはほとんどなく、かえっていつも知識があるために最も弱気の結論を引き出し、その結論を嫌々ながら実行に移すものが敗れるのだ。

ヒットラーのこの「健全な肉体」重視の理論は、ユダヤ人排斥と同じ理屈であり、ナチスはユダヤ人排斥の前から、精神病患者、同性愛者、身体障害者に対する「社会からの排除」を進めていました。日本でも先日、国の隔離政策下にあったハンセン病療養所で、入所者の赤ちゃんを職員が殺害していたことが判明して問題になっています。

またヒットラーは次のように、「学力低下」は全く気にしていません。

- ・ スポーツの価値

学校というものは、民族主義国家においては、身体的鍛錬のために極めて多くの時間を割かねばならない。…若い頭脳に重荷を負わすようなことがあってはならない。…二人の若い人々が意見の相違を、磨かれた一片の鋼でよりも拳で争って決着をつける方が、粗野ではないのだ。また、攻撃を受けたものが、その攻撃者から逃げ出して警官のところでは非をならす代わりに、自らを拳で守ることは、下品でない。だが若い健全な少年はまず第 1 に殴られるのに耐えることを学ぶべきである。

さらにふつうの教科教育に対しても「詰め込み教育批判」をしています。

- ・ 学問的教育の原則

第 1 に、95%までは若い頭脳が必要とせず、それ故また忘れてしまうようなことは一般に詰め込まれるべきでない。

【問題】

ヒットラーは、ふつうの学校以外の機関を「最高の学校」として位置づけています。それはなんだと思いますか。

予想

- ア 軍隊
- イ ナチス党
- ウ 家庭
- エ 地域社会

■教育機関としての軍隊

- ・ 最後で最高の学校としての軍隊

・・・軍隊では当然非難されるときに沈黙することを学ぶべきのみならず，必要な場合には不当の非難の時にも沈黙して堪え忍ぶことを学ばねばならない。

・・・兵役を終えた後に，彼には二種類の証明書を交付すべきである。すなわち，彼に爾後，公的な活動を許す権利証書としての国家市民証書と，結婚のため肉体的に健全たることを確認する健康証明書がそれである。

少年の教育と同じように，民族主義国家は少女の教育を同じ視点から行うことができる。そこでも，まず第 1 に肉体的訓練に重点を置くべきであり，その後初めて心的価値の促進に，最後に知的価値の促進に重点を置くべきである。女子教育の不動の目標は，将来の母たるべきことである。

【問題】

彼はナチ党にはどんな組織論を持っていたのでしょうか。党員を増やすことについて、ヒットラーはどう語っていたのでしょうか。

予想

- ア 拡大方針
- イ 非拡大方針
- ウ そのほか

■ エリート主義

- ・ 支持者と党员

宣伝の任務は支持者を募集することであり、組織の課題は党员を獲得することである。

運動の支持者とは、運動の目標に同意を明らかにするものであり、党员とはその目標のために闘うものである。

…受動的な形での認識は、怠惰で意気地のない大多数の人間にふさわしい。党员足ることは活動的志操を前提とし、それとともに少数の人間にだけふさわしいのである。

- ・ 党员採用の制限

運動に迫りうる最大の危険は、あまりにも急速な成果によって党员層が異常に膨張するということである。…多数の劣悪な、品位のない、だが特に卑怯な分子がその組織に入ってくる。そしてこの劣等者がついには闘争力を持ったものよりも優勢になり、今度は運動を自分たちの利益に奉仕するように強制し、自分たちの貧弱な剛胆さの水準にまで押し下げ、そして本来の理念の勝利を完成させるためには何もしないのである。

…すべての偉大な運動は、それが宗教的性質のものであると、政治的性質のものであるとを問わず、その力強い成功を、この原則を認識し、適用したことにもみ帰すべきである。だが特にすべての永続的成功は、この法則を考慮することなくしては、全く考えられないのである。

このようにヒットラーは「支持者」と「党员」を明確に区別し、党员の急速な拡大が組織にとって如何に危険かを明言しています。

それはあたかも、これまで数々の「教育理論」が支持者集めに奔走し、一大ブームとなったあと、消えていったことを思い出させてくれるようです。

【問題】

『わが闘争』というのは何に対する闘争なのでしょう。実は、ヒットラーが最初につけたタイトルは「〇〇に対する四年半のわが闘争」となっていました。では、何に対する闘争とされていたと思いますか。

予想

- ア 嘘，愚鈍，臆病
- イ アーリア人の栄光を貶める活動
- ウ ユダヤ人と共産主義の陰謀
- エ 神の摂理に反する悪魔

DVD「ヒットラー」



■うそと愚鈍，臆病

ヒットラーがつけたタイトルは「嘘と愚鈍，臆病に対する四年半のわが闘争」でした。ヒットラーは，具体的なものではなく，「嘘や臆病」という観念的なものと戦うナチ党の活動を，「正義の戦い」としたのです。「嘘と愚鈍，臆病」という観念は，どんな敵にも適用可能です。

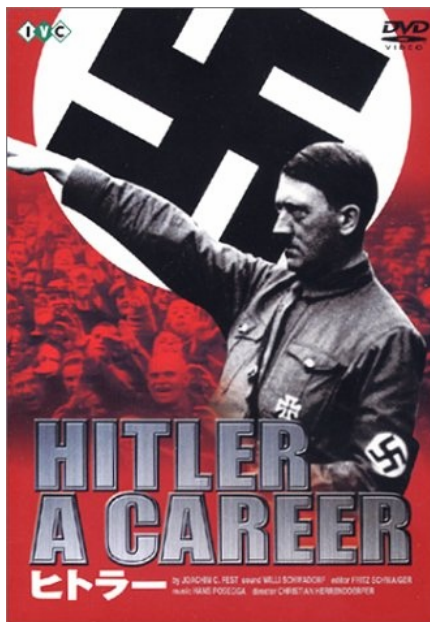
【問題】

現在，世界には「対テロ戦争」を推進している勢力があります。ではヒットラーは「テロに対抗する方法」としてどんなことを述べていると思いますか。

予想

- ア テロの原因を取り除く
- イ テロで対抗する
- ウ テロは無視する
- エ テロを利用して大衆を味方につける

DVD「ヒットラー」
西ドイツ制作



■ 対テロ戦争

・ テロ

テロは、同程度のテロで対抗しない限り、必ず成功に終わるものである。

このヒットラーの「対テロ原則」を、現在も軍事大国は、さらに拡大して使っているようです。「テロには国家テロで対抗する」と。

米国は無差別大量破壊兵器である核爆弾を実戦に使用した唯一の国ですが、「核爆弾の使用が終戦を早めて多くの人命を救った」として核兵器の使用を正当化しています。このことは、すでにヒットラーが『わが闘争』で次のように述べているとおりです。

民族がこの優勢の上で自己の生存のために戦うならば、したがって生か死かの運命の問題が国民に近づくならば、ヒューマニティとか、美とかの考量はすべて無に帰してしまう。

…ひとたび闘争のために、ヒューマニティとか美とかの観点が分離されるならば、これはまた宣伝の基準として適用され得ないのである。

…残酷きわまる武器も、それがより迅速な勝利を条件付けるならば、人道的であった。そして国民に自由の尊厳を確保するのを助ける方法のみが美であった。

「敵」を大量虐殺する残酷な兵器も、〈迅速な勝利と自国の国民の「自由」を守るため〉と宣伝するなら、それは「美」であり、人道的手段になるというわけです。

こうしてヒットラーの政治思想は効率的なものとして，現在も為政者に利用されているわけです。



■あとがき

「ヒットラー」という米国ドラマの DVD を見て、びっくりしました。「ヒットラーという頭のおかしなやつがいた」という筋になっていたからです。だいたいこのドラマの原題は「Hitler : The Rise Of Evil」（ヒットラーという悪魔の勃興）であり、キャッチコピーには「忘れるな、この国に悪魔がいたことを」となっています。この「ヒットラーは狂人か悪魔だから悪いことをした」という図式に納得できないボクは、前から買っておいた『わが闘争』を読んでみる気になりました。

『わが闘争』は訳に「教説」など辞書にない言葉が多く使われている上に、ほとんどが「ユダヤ人差別」についての内容なので、そのままでは読んでいただけません。そこで「大衆」や「宣伝」に関係することを中心に辞書のように使って調べてみたのです。

その本の内容は、このように首尾一貫としていて、「気が狂った人」の文章ではありません。そして彼はその政治哲学通りに行動して、ついには独裁者となれたのです。これは狂人の行動ではありません。

ドイツ制作の「ヒトラー、その生涯」というドキュメンタリーでは、さすがに「ヒットラーは悪魔かキチガイだった」という感じはありません。しかし、「国民は軍部にだまされた」とする日本と同じように、「ドイツ国民はヒットラーにだまされた」と主張しているような感じを受けました。それは本当なのでしょう。

こうなってくると、ただ『わが闘争』の中身ばかり調べていてもしょうがありません。歴史を学ばねばならないからです。学ばずにこのようなレポートを書けば、たくさん間違いをすることでしょう。

ボクには〈「ヒットラーと国民、民主主義」については、すでに研究会の誰かが調べているだろう〉という予想がありました。なぜならそれは「社会の科学」の基礎学力だと思えるからです。そして、すぐに「過去の大会で庄司章さんがレポートを発表していた」という情報を寄せてもらいました。しかし庄司さんは、すでに研究会の会員ではなく、連絡先がわかりませんでした。そこで教職員名簿をしらみつぶしに当たって、ようやく連絡を取ることができました。庄司さんから送っていただいたレポートを見て、わかったのは、庄司さんの「ナチスドイツとヒトラー」というレポートと小塚清さんの「ヒットラーと民主主義」のふたつのレポートを合わせて、竹内徹也さんが「ミニ授業書案〈ヒトラーと民主主義〉としてまとめていたことでした。そこで今度は竹内さんに連絡を取って、そのプランを送ってもらうことにしました。庄司さん、竹内さんにはずいぶんとわがままを言ってお世話になりました。お礼申し上げます。

ボクはそのプランをまずたのしみたいので、その内容には全く目を通していません。だからこのレポートには、大きな間違いがある可能性があります。ボクはいろんなことを研究するようになってすぐに、先駆者や先行研究のすばらしさを身をもって理解できました。だからこうした先行研究があることが、とてもうれしいです。

来年度限りで閉校を迎える勤務校については寂しい限りです。先日の全道大会で担当している部活動も終わってしまい、ますます虚しい感じがしています。担任を同僚に譲ったため、担当学級のないボクは、担任たちの修学旅行や学校祭への取り組みを寂しく見ているだけ。ちょっと後悔・・・。

Take me to heaven

丸山秀一 kasetsu.maruyama@nifty.com

*This is my pledge to you
I will follow through to the end
And we will find another plane
We'll be home again
And tonight I'm going to find true love, true love
We'll be together
Husband and wife
Now and forever
The rest of our lives
Well, take me to Heaven
Take me tonight
There is nothing words can say
On this our wedding day
"Wedding Day" Bee Gees*

この夏にはドイツ制作のヒトラー映画が公開になるようです。この映画に対してイスラエルのマスコミが「ヒトラーを賛美するものだ」と抗議しているのです、余計観たくなります。

<http://www.hitler-movie.jp/>



■ 典拠文献

- ・ アドルフ＝ヒトラー『わが闘争』上下巻，平野一郎・将積茂訳，角川文庫，1973
- ・ 『世界大百科事典』平凡社
- ・ 『エンカルタ 2005』マイクロソフト
- ・ 片岡啓治『天下をとる技術 新ヒトラー物語』てらこや出版，大和書房発売，1983
- ・ ジェームズ＝テラー，ウォーレン＝ショー『ナチス第三帝国事典』吉田八岑監訳，三交社，1993，原著 1987
事典としては，ものたりない。

- ・ 山本秀行『ナチズムの時代』世界史リブレット 49, 山川出版社, 1998
まとまっていて概観を知るのに大変良い。

■参考文献

〈ヒトラーと民主主義〉のプランをたのしみにしながらも、ついつい本を集めてしまいました。

- ・ DVD「ヒトラー」2003, 米国 TV ドラマ, 原題は「ヒトラー, 悪の勃興」
- ・ DVD「ヒトラー」1977, 西ドイツ, 原題は「ヒトラー, その生涯」
- ・ ヴィリー＝ミュンツェルンベルク『武器としての宣伝』星乃晴彦訳, 柏書房, 1995
原著はヒトラーと同時代に出版。共産主義者としてナチスの宣伝を分析した本。
- ・ アドルフ＝ヒトラー『続・わが闘争』角川文庫, 2004
出版されなかったヒトラーの原稿を元に作った本。まだ読んでいない。
- ・ 『アドルフ・ヒトラー 権力編』歴史群像シリーズ 42, 学習研究社, 1995
まとまっていてイメージを描くのによい。
- ・ 宮田光雄『ナチ・ドイツと言語』岩波新書, 2002
なかなかおもしろいが、難しい言葉が多すぎるかも。
- ・ 澤田謙『ヒトラー傳』講談社, 昭和7年
かつての日本がヒトラーをどう見ていたかが興味深い。ヒトラーが同盟国日本のことをどう思っていたのかも知れた

い。また歴史学者はヒットラーの蜂起を「一揆」としているが、その定義付けの意味が分からない。未読

- 水木しげる『劇画ヒットラー』ちくま文庫，1990
「ヒットラーはもともとおかしかった」のような描写がありますが、なかなかたのしめて参考にもなりません。
- 平井正『ゲッベルス』中公新書，1991
「大衆に対する宣伝」について知りたいなら、ヒットラーの片腕として主に宣伝を担当したゲッベルスのことも調べたい。
未読
- 小粥義雄『HITLER(ヒトラー)選挙戦略』永田書房，1994
ヒットラー礼賛の書。「ヒトラーの独裁政治，ユダヤ問題などの歴史的評価は後世に譲る」として、ヒットラーの選挙戦略を現代に利用しようとする自民党選挙ブレーンの書。ヒットラーをかわいいイラストで描き，かぎ十字のデザインも変更して，ヒットラーが受け入れられやすいように工夫している。自民党にはヒトラー政治戦略研究会というのがあるらしい。
- 阿部良雄『ヒトラー全記録』柏書房，2001
ヒトラーについての詳細な年譜。これが信頼できるのならば，これ一冊でもなんとかかなりそうぐらい。
- 丸山秀一「かぎ十字，その起源と象徴」サークル用レポート，2002
ナチスのシンボルである「かぎ十字」の起源とそれが表すものについてのレポート。あくまで参考として。